

# ちようと怒濤

小川未明

青空文庫



うつく  
美しいちようがありました。

だれがいうとなく、この野原のほらの中なかから、あまり遠方えんぼうへゆかないがいい。ゆくと花はながない、ということをしきしましたから、ちようは、その野原のほらの中なかを飛びまわっていました。

しかし、その野原のほらは広ひろうございました、毎日遊まいにちあそぶのに、不自由ふじゆうを感じかんませんでした。自分じぶんばかりでない、たくさんたのほかのこちようもいました。また、みつばちもいましたから、さびしいことはなかつたのです。

野原のほらには圃はたけがありました。菜なの花はなが咲さいています。また、麦むぎがしげっています。そのほか、えんどうの花はなや、いろいろの花はなが咲さ

いていました。その花の上や、青葉の上を飛びまわっているだけでも、一日かかるのであります。

ある日のこと、みつばちは、そのちように向かっていました。

「私たちは、菜の花や、えんどうの花の上を飛びまわっているだ

けなら、まちがいはありません。それはこの圃の中にさえいければ、

夏になると、なすや、うりの花が咲きますから、とうぶん花の絶

えるようなこともありません。その時分にはせみも鳴くし、いろ

いろの虫も鳴きます。まあ遠くへいくなどという考えを起さず

に、おちついていてのことです。ね。」と、みつばちはいったのです。

ちようは、このときに、格別、ほかへいつてみたいなどとい

う考えをもちませんでしたから、みつばちのいうことを笑つてき

いていました。

そして、風かぜに吹ふかれて、ちようは、美うつくしい羽はねをひらひらさせて、菜なの花はなの圃はたけを飛とんでいました。このちようの美うつくしいのは、ひとり、みつばちの目めにそう見みえたばかりでなく、同おなじちようの仲なかま間までも評ひょう判ばんになっなっていまいました。それほど、このちようの羽はねは大きおおく、赤あか・黄き・黒くろ・青あお、いろいいろろの色いろで彩いろられていまいました。

ちようは、圃はたけの上うえで、多おおくの仲なかま間まに出であいまいましても、自じぶん分の羽はねほどきれいななのを持もっている仲なかま間まを見みたことがあありまませせんんででした。また、そそんなに大おおきな羽はねを持もっているのも見みまませせんんででした。

「あなたは、ほんとうに美うつくしくお生うまれまれれつついてしああわわせせですすね。」  
と、ある仲なかま間まは、心こころからううららやましく感かんじて、そそういいまました。

あるとき、一つの羽はねの青あおい、小ちいさなこちようは、彼かれに向むかつて、  
「あなたは、けつして、この野原のほらからほかへいつてはいけません  
よ。この野原のほらの中の女なか王じょうですもの。」といいました。

「なぜ、そんなにほかへいつてはいけないのですか。」と、ちよ  
うは問といました。

すると、羽はねの青あおいちようは、

「私わたしは、やはり、この野原のほらにばかりいるのがつまらなくて、あち  
らへいつたのですよ。それはあんまり遠とおいところではなかつたの  
です。あの青木あおきの見みえる街道かいどうを一つ越こえたばかりです。すると  
ふいに、大おおきな袋ふくろのようなもので私わたしはすぐわれました。私わたしはびつ  
くりしました。人にんげん間が、私わたしを捕とらえたのです。みると、その人に

間は、ほかにも、私わたしよりはきれいなちやうを幾いくつも手てに持つて  
 いました。ちやうど、それはあなたのように美うつくしいちやうばかり  
 でした。しかし、あなたほど美うつくしいとは思おもいませんでした。私わたし  
 となることかと身震みふるいをしていますと、『なんだ、こんなつま  
 らないちやうか。』といつて、その人にんげん間は私わたしをふたたび自由じゆうに  
 してくれました。私わたしは、自分じぶんの体からだが、あなたのように美うつくしくな  
 ったのを、ほんとうに、そのとき、幸こう福ふくに感かんじました。私わたしは、  
 そこから、すぐにもとの道みちをもどつて、この野原のほらに帰かえつてきまし  
 たのです。』と美うつくしいちやうに向むかつて語かたりました。  
 ちやうは、その話はなしをきいて、いろいろの空くう想そうにふけたので  
 す。

「人間にんげんが、そんなにちようを捕とらえて、なににするのでしよう。」と、青あおいちようにたずねました。

「どうせ、殺ころされるのだと思おもいます。そして、なにになるものか私わたしにはわかりせんが、人間にんげんは残酷ざんこくなものだといえますから、格別かくべつ、用ようはなくても殺ころすのでしよう。」と、青あおいちようは答こたえました。

また、美うつくしいちようはたずねました。

「いったい、あちらに、なにがあるのでしょうか。」と行って、青あおいちようの顔かおを見守みまもつたのです。

青あおい、小ちいさなちようは、菜なの葉はの上うえに羽はねを休やすめながら、私わたしもよく、知しりませんが、なんでも話はなしにきくと、人にんげん間の住すん



でいるりっぱな町まちがあるそうです。その町まちには、この野原のほらに咲さいているよりも、もつと美しい花はなが、たくさんあるそうです。まだほかにいろいろ珍しいものめづらや、私わたしたちには用事ようじのない、名なの知らないようなものがいたるところにあるということです。「といいました。」

「そんな美しい花はなを人間にんげんはどこから持つてきたのでしょうか。また、なににするのでしょうか。」

「人間にんげんは、どんな遠とおいところからでも、船ふねや車くるまに乗のせて持つてくることができます。人間にんげんは、やはり美しいものうつくはなんでも好きすきなようです。ずっと南みなみの方ほうからも、また、北きたの方ほうからも、いろいろ珍しい草くさや、花はなを集あつめてくるのです。」

青い、小さなちようは、自分の知っているかぎりをみんな話してしまふと、

「またお目にかかります。」といつて、どこへともなく飛び去つてしまいました。

その後で、美しいちようは、独り物思いに沈みました。ちようは、人間の造つた町にいつてみたくなつたのです。「人間は、美しいものはなんでも好きだというから、きつと、自分も好きにちがいない。好きなものは、たとえ捕らえても、命を取るよくなことはしないだろう。そして、かえつて、愛してくれるにちがいない。」と、ちようは思つたのであります。

ちようは、いつまでも、この野原の中を、あちらこちらと飛ん

でいることに飽あきてしまいました。そして、ぜどひ一度、だれでも  
 いったてみたいと思おもう町まちにいった、いろいろな珍めづらしい花はなを見みてこよ  
 うと思おもいました。

ある日ひ、ちようは、いつか、みつばちのいったことをも忘わすれて、  
 野原のほらを離はなれて、あちらの空そらへ独ひとりで飛とんでゆきました。これは、  
 いい天気てんきの日ひで、空そらの色いろは、四方ほう一帯たいに晴はれていました。しばら  
 く旅たびをしたと思おもうと、ちようは、はるか目めの下したに黒くろい屋根やねの固かたま  
 った町まちを見みたのであります。

「美うつくしい花はなのあるというのは、この町まちか。」と、ちようは思おもいま  
 した。

しかし、ちようはどこへ降おりたらいちばん安あん全ぜんだろうと、し

ばらく空くうちゆう中に迷まよっていました。そのとき、なんともいわれな  
 い、やさしい音ねいろ色がきこえてきたのであります。ちようは、  
 かつて、こんない音おとをきいたことがありませんでした。これは  
 きつと、人にんげん間なかの中なかでの、やさしい人にんげん間すの住すんでいるところだ  
 ろうと、なんの考かんがえもなく、そう思おもわずにはいられませんでした。  
 ちようは、そのやさしい音ねいろ色のする方ほうへと、音おとをたどつて降おり  
 てゆきました。そこは、ある大おおきな家いえの裏うらのところであつて、い  
 い音ねいろ色は、へやの中なかからもれているのです。ちようは、なにに止と  
 まつたらいいかと、しばらく、この庭にわを見みまわしました。その庭にわ  
 は広ひろかつたとはいえ、もつともつと広ひろい野原のほらから飛とんできたちよ  
 うには、広ひろいとは感かんじられなかつたのです。

ちようは、幾つかの鉢に、いろいろの花の咲いているのを見  
 した。これは、どれも、いままで見たことのないような、美しい  
 花ばかりであります。ちようは、いつか羽の青いちようの物  
 語ったことなどを思い出しました。なかにも、ちようは、黒い  
 鉢に植わった、真紅なばらの花を見たときには、ほんとうに、び  
 つくりしてしまいました。それで、たちまち、なんともいえない  
 香気に恍惚となつてしまつて、ちようは、あとさきの考えもな  
 く、その真紅な花卉に吸いつけられたように、その上に降りて止  
 まつたのです。

こんなに美しい花が、この世の中にあるだろうか、ちようは  
 思いました。これこそ、私が憧れていた花だと、ちようは思いま

した。

「まあ、なんとというきれいなちようさんでしょう。わたしは、まだこんなに美しいちようは見たことがなかった。さあ、わたしのみつを思うぞんぶんに吸ってください。」と、真紅のぼらはいました。

遠く、町に憧れて飛んできたちようは、この花に接吻しました。それは、ほんのつかのまでであったのです。

「あすここに、子供があなたをじつと見ていますよ。きつと、ここにやってきて、あなたを捕らえますよ。そして、針であなたの体を刺してしまいますよ。はやく、お逃げなさい。そして、また、忘れずにきてください。わたしは待っています。」と、ばらの花

はいいました。

このとき、大きな袋のようなものが空を横ぎりしました。もし、もうすこし早くちようが、その花の上を飛び去らなかつたら、きつと、捕らえられてしまったのです。しかし、ちようは、ただ、はげしい風のあおりを身に感じただけで、無事でありました。

ちようは、その夜、近くの草原に休みました。そして、また、明るる日、この庭にいつてみたのです。けれど、哀れなちようは、ばらの花に近寄ることができませんでした。人間が、その庭にいたからです。

三日めの晩方、ちようは、今日こそは、花に近寄つて、いろいろの思いを語ろうと思つたのであります。

てんき 天気の変わる ぜんちよう 前兆か、にし 西の夕焼けは、きみ 気味の悪いほど、  
 たけ 猛り狂う炎のよううずまに渦巻いてあか紅くなりました。

ちようが、おお大きな羽はねをはばたいて、にわ庭さきに降りようとおした刹  
 つな 那、まっか 真紅なばらの花はなは、もう 寿 命じゆみようがつきたとみえて、おと音もな  
 く、ほろりほろりと、きんいろ金色を帯おびた夕日ゆうひの光ひかりの中なかにくだ砕けてち散る  
 ところであります。

これを見みたちちようは、おもどんなにうらめしく思おもつたでしょう。そ  
 して、またこの花はなと語かたるのはいつであらうとなげきました。ちよ  
 うはき気もくる狂いくるそうでありました。無むねん念と残ざんねん念とで、もう生いきて  
 いる心こころ地ちはなかつたのです。自じぶん分の体からだは、どうなつてもいいとい  
 うように、ちようは、絶ぜつぼう望ぼうのあまり、深ふかい考かんがえはなしに、空そらた



高く、高く、どこまでも高く舞い上がりました。ちようは、下  
 界の有り様を、もはやなにも見たいと思いませんでした。

すると、空には、怖ろしい、烈しい風が吹いていました。ちよ  
 うの体は、急流にさらわれた木の葉のように、あつと、思う  
 まもなく、遠く、遠く、吹き飛ばされました。

どんな強い風に飛ばされた木の葉も、一度は落ちるように、ち  
 ようは冷たい土の上に落とされました。そして、気がついたとき  
 に、すさまじい音が、真つ暗な中から、起こつてきこえていたの  
 です。そこは、海辺でありました。

ちようは、湿った砂の上にしがみついで、ふるえていました。  
 夜が明けると、自分の美しかった羽は破れていて、そして、前に

は青い青い海が、うねり、うねっているのが見られたのです。日  
 の光を浴びて、ちようは、いくらか元氣が出てきました。そして、  
 どこかの辺りに、花が咲いてはいないかと、ひらひらと舞い上が  
 ったのでした。けれど、風が強くて、ややもすると傷ついた羽が、  
 そのうえにも破れてしまいそうでした。やつと、砂の丘に黄色な  
 花の咲いているのを見つけて、その花の上にとまりました。  
 黄色な花は、ちようど星のように咲いていました。そして、風  
 に吹かれて、頭を地につけていました。あまりみつばちもいなけ  
 れば、また、ほかのちようの姿も見えませんでした。花は黙って  
 います。海の上では鳥が鳴いていました。なんとなく、悲壮な景  
 色であつたのです。

ちようは、じつとして、終しゆうじつ日、その花はなの上うえに止とまっています。もとの野原のほらへ帰かえろうと思おもつても、いまは方角ほうかくすらわからないばかりか、遠とほくて、傷きずついた身みには、それすらできないことでありました。

たちまち、海うみの上うえが真紅まつかに燃もえました。夕日ゆうひが沈しずむのです。この光景こうけいを見ると、ちようは、ふたたびばらの姿すがたを思おもい出だしました。もう永えい久きゆうに、あの姿すがたが見みられないと思おもうと、ちようは、また物狂ものくるおしく、昨日きのうのように、空高そだかく舞まい上あがったのです。美しい花弁かべんのように傷きずついたちようの姿すがたは、夕日ゆうひに輝かがきました。強い風つよかせは、無残むざんにちようを海うみの上うえに吹ふきつけました。そして、たちまち怒涛どとうは、ちようをのんでしまったのです。

—  
一九三三・三作  
—

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「中学生」

1922（大正11）年6月

※表題は底本では、「ちようと怒濤《どとう》」となっています。

※初出時の表題は「蝶と怒濤」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ちようと怒濤

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>